

【研究論文】

地域での世代間交流活動の参加経験が保育士を目指す大学生の認識に及ぼす影響

—本学学生による「笑話浪漫サロン」の実践を通して—

権 絃珠* 岸本美紀* 仲田勝美* 小野 隆*

要 旨

本研究では、保育者を目指す大学生が地域での世代間交流活動を通して、人々や地域についての認識にどのような影響を受けているのかを分析し、その意義と今後の実践課題について検討することを目的とする。平成 28 年度中に本学主催で開催した「笑話浪漫サロン」に参加した学生全員を対象とした質問紙調査及び一部の実行委員に対するインタビュー調査を実施し、分析した結果、学生たちにとって活動が、地域の人々と楽しくふれ合う場となっており、継続して参加したいという意欲も高かった。また、世代間交流活動が地域社会や人々への理解や視野が広がる機会、自らのコミュニケーション能力が高まる機会、今後の保育の専門職としての視点の形成につながる機会としても、有意義な活動となっていることが明らかになった。

キーワード：世代間交流、大学生の認識、ボランティア活動、持続可能社会

I. 研究の背景と目的

「少子高齢化」、「人口減少社会」、「世帯規模の縮小化」、「人間関係の希薄化」、「孤立化」といった言葉が社会の姿を反映するキーワードとなってきた。さらに、「コミュニティの崩壊」、「限界集落」、「消滅地域」等の衝撃的な見出しがマスコミを装飾し、私たちの暮らす地域社会の近未来を不安視する見方が拡散されている。今や社会の発展や繁栄を語るのにはナンセンスとなり、持続可能な社会の模索がコンセンサスを広げている¹⁾。「今」の社会を生きる一市民の生き方として、そして「未来」の社会を担い、生きていく子どもを保育する専門職養成を任務とする本学にとって、地域社会の現実に向き合い、持続可能な未来への模索が求められている。

実際に地域社会に目を向けると、人々の孤立と孤独の様子は、「孤食」「孤立死」「孤育て」「引きこもり」等の言葉に現れているように、子どもから高齢者、若者や壮年層を問わず広がっている。さらに、人間関係の断絶からくる孤独感、疎外感等による自殺の問題等は、人間らしい生き方を阻む要因として看過できるものではなく、人の生きる社会のあり方への本質的な問いかけとして、世代を超えた共通の

課題となってきた。地域において人々のつながりを再生し、誰もが安心して人間らしく生きて行ける地域づくりに向けて、政府からも「地域共生社会」づくりの新たな方針が打ち出され、公私協働の取り組みがことさら強調されている²⁾。また、自治体においても様々な地域住民の生活や福祉の課題について総合的、全体的に解決に取り組む地域福祉の視点に基づいた計画の策定と推進が図られている³⁾。

本研究では、地域社会に存在する様々な課題の中でも「世代間交流」に焦点を当て、その意義と今後のあり方を模索することを目的とする。世代間交流とは、「異世代の人々が相互に協力し合って働き、助けあうこと、高齢者が習得した知恵や英知、ものの考え方や解釈を若い世代に言い伝えること」とされる(藤原:2013)。人間の生の営みにおいて世代間のつながりは、生物的個体としての存続のために欠かせないものとして自然に形成されてきたものであるが、産業社会において経済的な必要性の減少によりしだいに弱体化してきた。その後、意図的、意識的な取り組みとして 1960 年代から世代間交流が活動として始まるようになり(金森:2012)、とりわけ近年においては、人口減少社会における地域社会の人間関係の修復や社会の持続可能性を探るうえでの手

*岡崎女子大学子ども教育学部

がかりの一つとして注目されている⁴⁾。このような視点から私たちは、世代間交流が地域のニーズとして実在しており、さらに現代的な課題解決の方法として有意義であるという点に着目し、大学という人的、物的資源を活かした地域貢献活動の一環として活動に取り組んでいる。とりわけ、大学の行う実践であるがゆえの教育的ねらいとして、学生の人間的な成長を図ること、そして、保育者養成の高等教育機関として保育所保育指針に明記されている保育上の意義を踏まえ（尾崎：2017）、将来を担う有能な保育者養成に向けての教育的な取り組みとして、学生主体による世代間交流活動を継続している⁵⁾。

本研究では、本学主催の地域の世代間交流活動である「笑話浪漫サロン」にボランティア活動の一環として（授業ではなく）参加した学生たちが、活動を通して個人的に、社会的にどのような気づきや考え方が生れるのかを実証的に分析することによって、世代間交流の意義及び今後の実践的課題等について検討する⁶⁾。

II. 研究方法

1. 調査対象者

(1) 質問紙調査

① 調査対象者

平成 28 年度本学に在籍した全学生 275 名

② 調査時期

2017 年 3 月、学年やクラスでの活動において質問紙を配布し、その場で回収する集合調査法により実施した。

(2) インタビュー調査

① 調査対象者

平成 29 年度「笑話浪漫サロン」実行委員の 4 年生 5 名

② 調査時期

2017 年 11 月 22 日～30 日

2. 調査内容

(1) 質問紙調査

① 質問項目の作成

学生の「笑話浪漫サロン」への参加回数、参加を通して感じたこと・考えたこと、「笑話浪漫サロン」の内容・運営に関する感想を把握するため質問項目を作成した。質問項目は、合計 45 項目あり、その内

訳は、Ⅰ「基本的質問」7 項目（学年、笑話浪漫サロンの参加回数、ボランティア活動への参加回数など）、Ⅱ「笑話浪漫サロンの参加を通して感じたこと・考えたこと」18 項目（高齢者を身近に感じられるようになったか、子どもと高齢者の間に入ってつなぐことができたか、人々や地域社会についての視野が広がったか、など）、Ⅲ「笑話浪漫サロンの内容・運営面」20 項目（内容面 10 項目：季節感が出てよかったか、など、運営面：学生全員参加でよかったか、など）である。

② 質問項目の評価

回答は、Ⅰ「基本的質問」については、数字の記入または該当する項目の選択であった。Ⅱ「笑話浪漫サロンの参加を通して感じたこと・考えたこと」、Ⅲ「笑話浪漫サロンの内容・運営面」は、「とてもそう思う」「まあまあそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の 4 件法とした。

(2) インタビュー調査

① 調査内容

質問紙調査の結果を踏まえ、学生が「笑話浪漫サロン」で得た経験や学びをどのように自覚しているのか、具体的に把握するため、平成 27 年度から「笑話浪漫サロン」の実行委員を務めている 4 年生実行委員 5 名にインタビュー調査を行った。

内容は、活動を通して学んだこと、世代間交流について考えること、大学の地域貢献について考えることなど、9 項目であった。

② 調査方法

一人あたり約 20 分の半構造化面接を実施した。その際許可を得て、IC レコーダーに録音し、第 2 筆者が逐語記録を作成した。

3. 分析方法

(1) 質問紙調査

質問項目全 45 項目について単純集計を行った。統計解析には、SPSS (Statistical Package for the Social Science) 解析ソフト（第 15 版 for windows）を使用した。

(2) インタビュー調査

逐語記録をもとに、質問紙調査の結果と関連する記述を抽出した。

4. 倫理的配慮

質問紙調査は、調査趣旨に同意した回答者による無記名での回答である。インタビュー調査は、対象者に調査概要と個人情報保護に関する説明を行い、許可を得て行った。また分析結果の記述内容が、対象者の個人情報の保護及び意思を尊重するよう努めた。なお、本研究は、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究倫理委員会の承認を得ている。

Ⅲ. 先行研究のレビュー

1. 世代間交流を通じての子どもの成長

世代間交流活動への参加と子どもの成長との関連に関する先行研究においては、以下のような意義が示されている。

多田 (1999) は、多世代社会におけるコミュニケーションの 4 つの「間」①時間②空間③仲間④世間が喪失した状況であることを示唆し、その間を埋める手段として「遊び」の重要性を挙げている。また中西ら (2005) は、「おばあちゃん先生と少人数で一緒に遊ぶ伝承遊びは、園児たちには遊び文化を意図的に習得する機会として意義深いのではないだろうか」とし、遊びにおいて、世代を超えて引き継がれるべき「伝承遊び」の重要性について触れている。主藤ら (2002) によれば、「文化継承に不可欠なものを子どもは遊びを通して経験することが必要でありその際に高齢者の存在が必然となる」と論じ、「このことは地域づくりとともに、幼児教育から除くことのできない重要な保育内容」と結論付けている。吉津ら (2017) は、子どもは成長し得て行くために必要な基盤としての「生活形式（人の間で生きて作用している価値・規範）」を高齢者から学び、高齢者は子どもから「存在を肯定」されるという互惠関係が世代間交流プログラムを通して成り立つ、ことに言及している。このように、子どもの成長にとって高齢者との積極的な交流に意義があることが示され、保育、幼児教育においても世代間交流が重要な課題であることが示唆されている。

2. 大学における世代間交流の意義

矢野ら (2016) は、保育者養成における「造形」を取り入れた学生と世代間交流の意義について、造形教材がコミュニケーションを促進する良い効果を持つことを示し、「素材として使用した紙粘土と貝殻の特性である手の感覚を楽しむことができる紙粘土

の感触が、高齢者とともに低年齢の幼児にも興味をひくものであり、活動への動機づけを高めたと思われる」と論じている。また加藤ら (2015) によれば、「ふれあい給食を活用した世代間交流は、栄養士教育の一環として学生達のコミュニケーション能力向上の一助となることが示唆された」とし、高齢期の栄養は、栄養学を学ぶ上で重要な分野の一つであり、高齢者とのふれあいにより高齢者の実態を知る機会になるという点でも具体的な効果があるとしている。このように、高等専門教育機関においても、各分野の専門性や機関の特性を活かしつつ世代間交流を進めて行くことに、教育的な効果が期待できることが示唆されている。

3. 大学支援ボランティアの意義と効果

上記のような専門的な視点での教育活動のほか、大学では、学校支援ボランティアという授業の一環として推進しているところも数多くある。その意義や成果として、浅川ら (1998) によると、「共感性の高い者ほどボランティア参加志向が高い傾向がある」と論じている。伊多波ら (2016) も「奉仕ボランティア志向が効力感や協調性に影響を与えている」とし、学生の成長に影響をもたらすことを示唆している。そして、より効果的なボランティア活動とするために必要なこととして、荒井ら (2017) は「ボランティア活動の推進やボランティア教育の実効性を高めるには、参加成果志向構成要因として 5 因子（自己成長・キャリア開発・精神的高揚・ヘルス安寧・評価承認）が存在し、これらを的確に捉え、これらに適切に応える方策をとる必要がある」とことを示唆している。そして溝部ら (2014) は、学校支援ボランティア活動経験は大きな教育効果があるとしつつ、「学校支援ボランティア活動の効果的な活動時間として、少なくとも週 1 回程度の頻度で 1 セメスター期間継続することが一つの目途となるであろう」と具体的な回数や時間を提示している。

Ⅳ. 研究結果

1. 単純集計結果

(1) 分析対象者

平成 28 年度本学全在学学生 275 名を対象に、平成 28 年度に開催した笑話浪漫サロンに関する質問紙調査を実施した。回答があった 231 名（回収率 84.0%）を分析対象者とする。

(2) 基本的質問

質問項目「Ⅰ. 基本的質問」1～7の結果を示す。

①学年

1年生 64名 (27.7%)、2年生 50名 (21.6%)、3年生 67名 (29.0%)、4年生 50名 (21.6%)であった。

②笑話浪漫サロンへの関わり方

実行委員 18名 (8.0%)、当日ボランティア 198名 (88.3%)、その他 8名 (3.6%)であり、約9割が当日ボランティアとしての参加であった。

③参加回数

結果を表1に示す。

表1 Ⅰ-3 参加回数

	人数	%
0回	5	2.2
1回	159	71.0
2回	37	16.5
3回	2	0.9
4回	3	1.3
5回	2	0.9
6回	3	1.3
7回	6	2.7
8回	2	0.9
1, 2回	1	0.4
2, 3回	4	1.8
合計	224	100.0

1回の参加者が159名(71.0%)と最も多かった。学生の平均参加回数は、1.56回であった。

④参加を楽しめた程度

どの程度、笑話浪漫サロンの参加を楽しめたかについては、「とても楽しかった」66名(29.7%)、「まあまあ楽しかった」147名(66.2%)、「あまり楽しくなかった」9名(4.1%)、「全く楽しくなかった」0名(0.0%)という結果となり、95%以上の学生が楽しめたことがわかった。

⑤笑話浪漫サロンへの今後の参加希望

「参加したい」173名(79.4%)、「参加したくない」42名(19.3%)、「その他」3名(1.4%)という結果となり、約8割の学生がまた笑話浪漫サロンに参加したいと回答した。

⑥在学中経験した他のボランティア活動

笑話浪漫サロン以外に経験したボランティア活動について尋ねたところ、ある177名(78.0%)、ない50名(22.0%)という結果であった。約8割に近い学生が、笑話浪漫サロン以外のボランティア活動を経験していた。

⑦ボランティア活動への考え方

結果を表2に示す。

表2 Ⅰ-7 ボランティア活動への考え方

	人数	%
もっと幅広い活動に参加したい	42	18.6
内容に興味があれば参加したい	96	42.5
時間があれば参加したい	60	26.5
交通費等の実費補助があれば参加したい	13	5.8
あまり参加したいとは思わない	5	2.2
複数回答	10	4.3
合計	226	100.0

最も多い結果は、「内容に興味があれば参加したい」96名(42.5%)であった。「あまり参加したくない」5名(2.2%)であったことから、9割以上の学生がボランティア活動への参加を前向きに捉えていることがうかがえた。

(3) 笑話浪漫サロンの参加を通して学生が感じたこと・考えたこと

質問項目「Ⅱ. 笑話浪漫サロンの参加を通して感じたこと・考えたこと」1～18の結果を表3に示す。「とてもそう思う」4点、「まあまあそう思う」3点、「あまりそう思わない」2点、「全くそう思わない」を1点とし、平均値を求めた。

逆転項目9「高齢者とのコミュニケーションは難しかった」、10「子どもとのコミュニケーションは難しかった」を除く16項目で、「とてもそう思う」、「まあまあそう思う」と答える学生が過半数を占めた。

「とてもそう思う」、「まあまあそう思う」(以下、「ポジティブ回答」)とする。「ポジティブ回答」の累積パーセント上位5項目をみると、第1位は1「高齢者が身近に感じられるようになった」(94.3%)であり、笑話浪漫サロンに参加した90%以上の学生が高

表3 笑話浪漫サロンの参加を通して感じたこと・考えたこと

項目	とてもそう 思う	まあまあそ う思う	あまりそう 思わない	全くそう思 わない	人数(%) 合計	ポジティ ブ%	平均点	SD
1.高齢者を身近に感じられるようになった	96(42.5)	117(51.8)	13(5.8)	0(0.0)	226(100.0)	94.3	3.37	.59
2.子どもが身近に感じられるようになった	106(46.9)	91(40.3)	28(12.4)	1(0.4)	226(100.0)	87.2	3.34	.71
3.子どもの保護者が身近に感じられるようになった	56(24.8)	114(50.4)	51(22.6)	5(2.2)	226(100.0)	75.2	2.98	.75
4.教職員が身近に感じられるようになった	56(24.8)	105(46.5)	60(26.5)	5(2.2)	226(100.0)	71.3	2.94	.77
5.学生同士の距離感が近くなった	57(25.2)	120(53.1)	44(19.5)	5(2.2)	226(100.0)	78.3	3.01	.73
6.色々な人との接し方やコミュニケーション力が高まった	79(35.1)	111(49.3)	33(14.7)	2(0.9)	225(100.0)	84.4	3.19	.71
7.子どもと高齢者の間に入ってつなぐことができた	47(20.8)	108(47.8)	63(27.9)	8(3.6)	226(100.0)	68.6	2.86	.78
8.高齢者は意外と若いと思った	68(30.4)	118(52.7)	37(16.5)	1(0.4)	224(100.0)	83.1	3.13	.69
9.高齢者とのコミュニケーションは難しかった	27(12.0)	92(40.9)	90(40.0)	16(7.1)	225(100.0)	47.1	2.42	.79
10.子どもとのコミュニケーションは難しかった	23(10.2)	80(35.6)	105(46.7)	17(7.6)	225(100.0)	54.3	2.52	.78
11.高齢者とお互いに理解し合えると思えるようになった	33(14.7)	129(57.6)	60(26.8)	2(0.9)	224(100.0)	72.3	2.86	.66
12.自分は社会の一員として役立っていると実感した	30(13.4)	104(46.4)	84(37.5)	6(2.7)	224(100.0)	59.8	2.71	.73
13.ボランティア活動への参加意欲が増した	52(23.2)	129(57.6)	42(18.8)	1(0.4)	224(100.0)	80.8	3.04	.66
14.人々や地域社会についての視野が広がった	49(22.0)	143(64.1)	28(12.6)	3(1.3)	223(100.0)	86.1	3.07	.63
15.保育現場での世代間交流について関心が増した	53(23.8)	143(64.1)	26(11.7)	1(0.4)	223(100.0)	87.9	3.11	.60
16.達成感があった	61(27.4)	111(49.8)	48(21.5)	3(1.3)	223(100.0)	77.2	3.03	.74
17.自分の人間関係が広がった	42(18.8)	102(45.7)	73(32.7)	6(2.7)	223(100.0)	64.5	2.81	.77
18.実習の時、職に就いた時の参考になった	52(23.5)	99(44.8)	65(29.4)	5(2.3)	221(100.0)	68.3	2.90	.78

高齢者を身近に感じられるようになった。第2位は15「保育現場での世代間交流について関心が増した」(87.9%)であったが、笑話浪漫サロンに参加したことで、保育職に就いた後の世代間交流へも関心が増したことがうかがえる。第3位は2「子どもが身近に感じられるようになった」(87.2%)であった。本学では、実習を通して子どもと関わるが、保育とは異なる活動を共有することで、より子どもを身近に感じられるようになったことが推察される。第4位は14「人々や地域社会についての視野が広がった」(86.1%)、第5位は6「色々な人との接し方やコミュニケーション力が高まった」(84.4%)であった。笑話浪漫サロンへの参加を通して、それまでの人間関係や社会から視野が広がったり、コミュニケーション力が高まったりしていることを実感している学生が8割以上いた。

平均値についてみると、上位5項目は平均値が高い順に、第1位1「高齢者が身近に感じられるようになった」(3.37)、第2位2「子どもが身近に感じられるようになった」(3.34)、第3位6「いろいろな人との接し方やコミュニケーション力が高まった」(3.19)、第4位8「高齢者は意外と若いと思った」(3.13)、

第5位15「保育現場での世代間交流について関心が増した」(3.11)であった。第1位と第2位の結果から、高齢者と子どもを身近に感じられるようになったという項目の得点の高さがうかがえる。

2. 因子分析結果

質問項目「Ⅱ. 笑話浪漫サロンの参加を通して感じたこと・考えたこと」18項目について、主因子法による因子分析を行った。固有値1以上、因子の解釈可能性という点から、3因子構造が妥当であると考えられた。

そこで、再度主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量が0.40未満で、かつ2因子にまたがって0.40以上の2項目を分析から除外し、残りの16項目に対して再度主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。最終的に1つの因子について因子負荷量が0.40以上の16項目を採用した。最終的な因子パターンを表4に示す。

表4 「Ⅱ. 笑話浪漫サロンの参加を通して感じたこと・考えたこと」の因子分析

(N=219)

	I	II	III	共通性	M	SD
<u>第1因子 社会への関心と貢献</u>						
高齢者とお互いに理解し合えると思えるようになった	.619			.46	2.86	.66
自分が社会の一員として役立っていると実感した	.767			.59	2.71	.73
ボランティア活動への参加意欲が増した	.755			.59	3.04	.66
人々や地域社会についての視野が広がった	.817			.69	3.07	.63
保育現場での世代間交流について関心が増した	.793			.63	3.11	.60
達成感があった	.680			.53	3.03	.74
自分の人間関係が広がった	.712			.62	2.81	.77
実習の時、職に就いた時の参考になった	.674			.60	2.90	.78
<u>第2因子 人間関係・距離感</u>						
高齢者を身近に感じられるようになった		.481		.34	3.37	.59
子どもを身近に感じられるようになった		.807		.65	3.34	.71
子どもの保護者を身近に感じられるようになった		.806		.65	2.98	.75
教職員が身近に感じられるようになった		.553		.46	2.94	.77
学生同士の距離感が近くなった		.536		.44	3.01	.73
子どもと高齢者の間に入ってつなぐことができた		.521		.43	2.86	.78
<u>第3因子 コミュニケーションの難しさ</u>						
高齢者とのコミュニケーションは難しかった*			.910	.83	2.42	.79
子どもとのコミュニケーションは難しかった*			.902	.81	2.52	.78
因子寄与	6.16	1.71	1.52	9.39		
因子寄与率 (%)	38.52	10.71	9.50	58.74		

*は逆転項目

第1因子は、社会の一員として役立っているという思い、ボランティア活動への参加意欲の増加や地域社会への視野の拡大などに関連する項目であることから「社会への関心と貢献」と命名した。第2因子は、活動を通して高齢者や教職員、同じ学生を身近に感じられるようになったことや子どもと高齢者の関係をつないだことから、「人間関係・距離感」と命名した。第3因子は、高齢者、子どもとのコミュニケーションの難しさに関する項目であることから、「コミュニケーションの難しさ」と命名した。

3. インタビュー調査の結果

上記の因子分析の結果、「社会への関心と貢献」、「人間関係・距離感」、「コミュニケーションの難しさ」という3つの因子構造が見られたことを踏まえ、さらに、笑話浪漫サロンの企画・運営の実行の中心

となった実行委員5名に対して行ったインタビュー調査で得られた結果との関連性を把握することを試みた。

まず、第1因子の「社会への関心と貢献」についてインタビュー結果を合わせてみると、「やることの大変さより、やったときの楽しさが上回る」「自分も楽しめる 相手の人も楽しんでくれるので楽しい」「はじめはやりがいを感じられなかったが、最近では高齢者からありがたうと言われることが嬉しかった、もっと頑張らないと、と思う」「もっと出来たなという反省の方が多かった」といった意見と第1因子を構成する項目の「ボランティアへの参加意欲の高まり」、「達成感」とつながると見られた。次に、「多くの世代との交流があることで人間性の幅が広がる」、「岡崎市でもっと取り組むことができればよい」といった意見が、第1因子を構成する項目の

「人々や地域社会についての視野が広がった」と関連するものとみられた。また、「いろんな世代とかかわる経験がこれからの仕事に役立つのではないかと思う」といった意見が、第1因子を構成する項目の「実習の時、職に就いた時の参考になった」と関連するものとみられた。

次に、第2因子の「人間関係・距離感」についてインタビュー結果を合わせてみると、「学生に関わるきっかけとなることが大切」、「初対面なのでかわるきっかけとなることが大切」といった意見が、第2因子を構成する項目の「子どもと高齢者の間に入ってつなぐ」と関連するものとみられた。

なお、第3因子の「コミュニケーションの難しさ」については、今回のインタビュー結果との関連はほとんどみられなかった。

V. 考察及び今後の課題

1. 考察

(1) サロン活動に参加した学生が感じたこと

単純集計の結果、約95%の回答者が世代間交流サロンに参加して「楽しかった」と評価しており、学生にとって世代間交流が苦ではなく、楽しむ場として受け止められていることがわかる。さらに、約8割の学生が今後も世代間交流サロン活動に参加したいという回答から、楽しい経験が次の活動へのポジティブな動機づけになっているとみられる。

サロン活動を通して、気付いたことや考えたこととして、まず単純集計の分布からみると、「高齢者が身近に感じられるようになった」(94.3%)、「保育現場での世代間交流について関心が増した」(87.9%)、「子どもが身近に感じられるようになった」(87.2%)、

表5 実行委員向けのインタビュー調査の結果

	世代間交流について考えること	ボランティア活動について考えること	大学の地域貢献について考えること
A	生きてきた環境が違うことがあり、考え方の違いが出てきている。違いがあるから自身の人間性の成長がある <u>子どもにとっても同じ人、世代との交流だけでなく、多くの世代との交流があることで人間性の幅が広がるよい交流</u>	そう思っていなかった・イメージとして、だれかのための奉仕・委員会を通して、誰かのためというより自分が経験し成長へつながっていて、誰かのためというより、自分が得をしている	近所の中で交流を深めることは難しい(個々の家族単位では)が、大学が間に入ることで、 <u>大学と地域の交流ができる 地域同士の交流が深められる 地域をつなげていくことができる</u>
B	交流で学生が中間の存在で、学生が関わるきっかけとなることが大切 初対面なのでかわるきっかけとなることが大切 大人の人はこんなに優しいんだと 高齢者にとっては色々話したいだろうから、人生の楽しみとなる	<u>自分からやりたいと思うこと、思えることが大切</u> <u>そういう気持ちがあると会の内容だったり真剣に考えることができる</u>	この大学が地域と密接である 大学がかかわろうという姿勢がみられ、地域の人も参加してくれることから、ボランティア活動がたくさん経験できるところ サロン以外にもそういう活動がある 保育者を目指す人が来る場所なので、 <u>いろんな世代とかかわる経験がこれからの仕事にも役立つのではないかと思う</u>
C	地域ごとによって交流の度合いや頻度が違う F高校では私たちが言わなくても交流がされていたが、F高校では子どもとどう話してよいのか分からない、戸惑っていた高齢者がいたことから、岡崎市でもっと取り組むことができるのでは	アルバイトはお金がもらえる分しかかりやらないといけない責任感がでるが、ボランティアはそうでない(みかえり)ので、はじめはやりがいを感じられなかったが、最近では高齢者から「 <u>ありがとうね</u> 」と言われることがすごい嬉しかったし、F高校の高校生が頑張っている姿を見て私たちももっとできるなと、高校生もボラだからこそここまでできているんだなと、思うと私ももっと頑張らないか、と思った	うーん・・・盛り上げているな、新しいこういう場をつくっていくことで、交流が生まれているな、すいか隊など知ることができ団体ともつながることができて、どんな子どもがいるのか知ることができてよかったなと。貢献だなんておこがましい、もっとできたな。ぐだっちゃんということをよく思った、反省の方が多かった
D	最近子どもたちも核家族化している中でお姉さん世代や年寄り世代と交流できることが楽しいみだったり、みんなにとって楽しい時間をつくれることが交流会、昔のことなかなか知れないが、昔と今のことを知ることができる場、	高校の時も行ったことがあるが、学校で行っているので授業みたいな感じで取り組んでいる 奉仕というイメージがあるが サロンのボラは自分たちが楽しんでる、やることの大変さより やったときの楽しさが上回る いろんなボラがあるのだと思った	なっているか分からないが、普段は出会わないで会えない人が合えることは友達づくりにもなるし、 <u>近い地域の人があつまることで温かい地域づくりにもつながることが良い</u>
E	<u>普段から、子どもからお年寄りまでかわる機会がない。サロンを通して地域の人と交流できるのはいいこと</u>	ボラを通して自分も楽しめる <u>相手の人も楽しんでくれるので楽しい</u> 嫌ではないかも	あまり地域貢献と考えることはなかった そんな感じではなかった、・・・難しい。そういった場所があるから、高齢者のためになっているのかな・・・

「人々や地域社会についての視野が広がった」(86.1%)、「色々な人との接し方やコミュニケーション能力が高まった」(84.4%)であった。平均値の上位項目から見ても類似した傾向がみられた。

このことから、世代間交流サロンへの参加により、学生は高齢者世代や子ども世代と関わる経験から異世代の人々への接点ができ、身近な存在として認識するようになるということが明らかになった。この結果は、人間は実際に関わる経験を増やすことによって他者との距離感が近くなるという社会的距離感の研究の知見ともつながる結果といえる(栄ほか：1997)。

また、保育現場での世代間交流についての関心が高まった、色々な人々との接し方やコミュニケーション能力が高まった、人々や地域への視野が広がったという項目においてもポジティブな回答が8割以上と高く、同世代中心の人間関係から多様な年齢層の地域の方々との交流活動が、学生には新しい人間関係形成やコミュニケーション力を習得する機会としての意味を持ち、地域や社会の人々を視野に入れた保育現場の専門職としての観点を形成する一つのきっかけとなるという意味合いとして認識されていることが推察された。

斎藤は、子どもや若者の「世代を超えない日常」とそれによる様々な問題を指摘している(2010：1-31)。一方、子どもや高齢者といった異世代と接した経験は、若者のソーシャルスキルや養護性にポジティブな影響を与え、生活への態度やボランティアへの積極性などにも影響を与えているとされる(2010：59-62)。本研究の結果は、このような先行研究の知見ともつながる部分があり、大学生という若者にとっての世代間交流活動経験の重要性が再確認できた。

(2) サロン活動参加の意義～学生の気づきと学び

インタビュー調査の結果と因子分析の結果が関連する意見がみられる反面、関連する内容を伴わないものもみられた。特に第1因子の「社会への関心と貢献」において、多くの関連する内容が示されていた。このことから、実行委員としてサロンを企画・運営した経験が、その意義や、自身の地域や人々への理解を深めることにつながっていったものとみられる。また、自身がサロン運営の中で、個人的な充実感ややりがいを感じているようであった。そして良いサロンとしたい思いが、「そのように思うことは

おこがましい」、「もっとできたのに」と、内省する意見として現れたものと考えられる。

また第2因子の「人間関係・距離感」では子どもと高齢者の間に入り、両者をつなぎ合わせるものの意識があったと考えられる。これはサロンの運営において重要な視点であり、サロン自体の良し悪しと直結する課題であることから、意識が高くなったことが推察できる。

一方、第3因子の「コミュニケーション」に関連する内容が見られなかった理由として、コミュニケーションの難しさはサロンの実施回数を重ね、経験値が上がっていることや、保育所・幼稚園教育実習での経験から、困難さは感じていないことが考えられる。インタビュー調査対象の実行委員が全員最上級生であったことがこのような結果につながる要因であったと推察できる。

このように、実行委員の中心となったメンバーらは、「社会への関心」と「人間関係・距離感」を意識した運営や、学びを得ているものと理解できるだろう。このことから、実行委員としてサロンを運営した学生らは、アンケートの対象となっている学生が感じ取っていることよりも更に深い次元で、サロンの意義や、よりよい会にしたいと思う高い意識や意欲、また充実感を強く持つに至っていると推察できる。つまり、運営にたずさわることに、社会への関心の高まりや、サロン運営において責任感と自主性、達成感がより強く現れる傾向があり、それはボランティアとして参加した学生らとは異なる、「実行委員独自の特性」として理解することができるということである。このことから、サロンの参加回数の増加や積極的な運営への参画が、より深い学びを得ることとつながっていく要因としてあることが理解できる。

2. まとめと今後の課題

世代間交流が子どもや高齢者に与える効果に関する研究は比較的に多く、一貫して肯定的な効果が報告されている(北村：2003、北村：2004、七木田ほか：2007)。しかし、大学生を対象としたものはボランティア活動の効果に関連する研究は数多くあるが、世代間交流に焦点化された実証研究はまだ少なく、本研究では、大学生にとっての世代間交流活動の効果に焦点を当てたところに意義がある。研究の結果、学生たちには「笑話浪漫サロン」への参加が、地域の人びとと楽しくふれ合う場となっており、継続的

な参加意欲も高いということがわかった。また、世代間交流活動が自らのコミュニケーション能力が高まる機会、地域社会や人々への関心や視野が広がる機会、今後、保育の専門職としての視点の形成の機会としても有意義であることが確認できた。

一方、大学の地域協働や地域貢献としての本取り組みの位置付けについての学生の認識は必ずしも十分とは言えない。今後の活動に向けての課題として、人間関係や世代間関係の希薄化といった地域社会の変容の中で、地域共生社会、持続可能社会といったこれからの社会のあり方を考え、より広い視野を持って主体的に活動に取り組めるようにするための教育的な支援システムづくりが重要な課題である。

今回の知見を踏まえ、世代間交流活動の継続を通じて実践知を蓄積するとともに、活動が大学生の成長に与える影響について多面的に分析できるよう、より精緻な枠組みを設定した研究を行う必要があると考える。

*本論文の執筆分担は、権がⅠ・Ⅴ1(1)・Ⅴ2、岸本がⅡ・Ⅳ1・Ⅳ2、仲田がⅢ・Ⅳ3・Ⅴ1(2)、小野が要旨、文献整理及び全体の校正を担当した。

注

- 1) 持続可能性は、平成に入ってから使われ始めた言葉。右肩上がりの時代の終わりと軌を一にする。(朝日新聞 2018 年 1 月 4 日 (木) 朝刊「この街で暮らし続けるために、平成とは一時代の転機」)より。
- 2) 2016 年 7 月に厚生労働省が立ち上げた「我が事・丸ごと」地域共生社会実現本部は、「地域共生社会の実現」を目標に設定。その中で、分野・対象者別に進められてきた縦割りの仕組みを見直し、地域のすべての関係者が「我が事」として、生活課題に「丸ごと」対応できる社会を今後目指すべきイメージとして提示。
- 3) 第 3 次岡崎市地域福祉計画 (平成 29～31 年) 岡崎市ホームページ
<http://www.city.okazaki.lg.jp/1300/1303/1322/p020155.html>
2017 年 12 月 28 日アクセス
- 4) 日本世代間交流学会 2017 年度大会は、「地域社会と世代間交流～持続可能な地域社会の形成のために～」をテーマに熊本で開催された。また、全国

市長会政策推進委員会は、平成 28 年度に「人口減少社会における多世代交流・共生のまちづくりに関する研究会を開催し、報告書をまとめている。

- 5) 2017 年改定「保育所保育指針」では、3 歳以上児の領域「人間関係」の内容に「⑬高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ」が挙げられている。2017 年改訂「幼稚園教育要領」第 2 章ねらい及び内容人間関係の内容 (13) と同じ。
- 6) 笑話浪漫サロンとは、岡崎女子大学子ども教育学部生が中心となって、岡崎市内の高齢者や子ども (幼児～小学生) と一緒にふれあう世代間交流の場づくりである。年 3～6 回、市内の各所に出向いて開く出張型サロン。活動の前身は、10 年前に当時の人間福祉学科生が大学周辺の高齢者を大学構内に招待して開いた「岡短昭和浪漫サロン」。

引用文献

- ・藤原佳典、「第二章 世代間交流活動の意義」倉岡正高編著、『地域を元気にする世代間交流』、遊行社、2013、pp.28-35
- ・金森由華「高齢者と子どもの世代間交流—交流内容を中心に—」『愛知淑徳大学論集・福祉貢献学部編』2 号、2012、pp.69-77
- ・尾崎司「保育における「高齢者とのかわり～世代間交流概念から領域「人間関係」をとらえ直す」『教員養成教育推進室年報』第 4 号、2017、pp.57-63
- ・広井良典編著『老人と子ども統合ケア—新しい高齢者ケアの姿を求めて』、中央法規出版、1999、pp.22-29
- ・中西智子、伊藤雅代「高齢者と子どもたちの遊びの展開—季節を感じる遊びを通して—」『三重大学教育実践総合センター紀要』第 25 号、2005、pp.97 - 101
- ・吉津晶子、溝邊和成「調査研究シリーズ 118 世代間交流の教育的意義に関する研究の動向と課題」『海外事情研究』44 号、2017、pp.109-127
- ・矢野真、田爪宏二、吉津晶子「保育者養成におけるコミュニケーションをテーマとした造形活動—造形活動による幼児と高齢者間の世代間交流に対する支援事例から—」『京都女子大学発達教育学部紀要』第 12 号、2016、pp.155-162
- ・加藤美穂、三浦英雄、加藤恵子「ふれあい給食が世代間交流として地域高齢者および短大生に与える効果」『名古屋文理大学紀要』第 16 号、2015、pp.19-26

- ・浅川潔司、仲上馨子、古川雅文「大学生の共感性とボランティア活動の関係」『学校教育学研究』10、1998、pp. 89-93
- ・伊多波美奈、首藤敏元「大学生におけるボランティア経験とボランティア活動に期待する成果、自己効力感及び協調性との関連」『埼玉大学紀要』65(2)、2016、pp.35-46
- ・荒井俊行、野嶋栄一郎「大学生のボランティア活動への参加成果志向が参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響」『日本教育工学会論文誌』41(1)、2017、pp.97-108
- ・溝部ちづ子、石井眞治、斉藤正信ほか「教員志望大学生の学校支援ボランティア活動の教育効果に関する研究(2)」『比治山大学紀要』第21号、2014、pp.31-43
- ・栄セツコ・小澤温・岡田進一ほか「精神保健ボランティアとコミュニティづくり」『大阪市立大学生生活科学部紀要』第45巻、1997、pp.243-252
- ・斎藤嘉孝『子どもを伸ばす世代間交流』、勉誠出版、2010、pp.1-31.
- ・斎藤嘉孝、前掲書、pp.59-62
- ・七木田敦・上村眞生・岡花祈一郎ほか「世代間交流が幼児・高齢者に及ぼす影響に関する実証的研究」、『幼年教育学年報』29、広島大学大学院教育学研究科、2007、pp. 65-71
- ・北村安樹子「シニア・シルバー層の世代間交流の実態と意識」『LifeDesign REPORT』、2004.9、pp.24-31
- ・北村安樹子「福祉政策における世代間交流の視点ー中高年・高齢者の保育園派遣事業の試みー」『LifeDesign REPORT』、2003.11、pp.16-23

参考文献

- ・栗山昭子編『地域における子育て支援と世代間交流』、ふくろう出版、2009
- ・草野篤子、内田勇人、溝渡和成他『多世代社会をつむぐ世代間交流次世代への『いのち』の連鎖をつなぐ』、三学出版、2002

【謝辞】

笑話浪漫サロンの企画運営に尽力されている岡崎女子大学子ども教育学部の学生実行委員をはじめとしたボランティアの皆様、学部教員の皆様、大学の地域協働推進センターの関係者にお礼を申し上げます。何より当サロンにご参加頂き、学生達を励まし、

盛り立てて下さっている地域の皆様のお力添えに感謝申し上げます。

本研究のアンケート調査及びインタビュー調査に協力頂いた学生の皆様に特筆してお礼を申し上げます。